中国短大紀要第9号（1978）

保育者に関する研究*

—パーソナリティ検査・興味検査にみる保育学生の特質—

平松芳樹

目的

乳幼児期の保育・教育の重要性は改めて言うまでもなくひろく認められていることである。したがって，この乳幼児期における保育者の役割の期待されるところは大きい。

さて，保育者としての資格や免許を得るためには短期大学等での専門教育を受けることが要求されるのであるが，この養成機関である短大に入学した時点ですでにかなり共通した特質を備えており，短大での専攻を異にする学生とは相異するパーソナリティ特性がみられるようであることは，筆者の以前の調査（平松，1972，1973，1975）にもあらわれていた。さらに，椋野ら（1976）との共同研究による女子短期大学生の興味についても，専攻学科によって異なった興味パターンがあることを見出した。また，D. Super ら（1962）はパーソナリティと興味とは関係があると報告しているので，今回の調査に使用したテスト相互の関連についても検討を加えてみる。

パーソナリティテストとして SIV と EPPS を用い，興味については短大生用興味テストを実施し，それらをとおしてみられる短大の保育科学生の特質を考察し，保育者養成の問題を検討する資料の一端としたい。

方法

調査に使用したテストは以下の3種であり，調査対象は昭和48年度入学から昭和52年度入学に至るいずれも中国短期大学保育科の学生1・2年次生である。

1．KG—SIV** すなわち対人関係価値尺度による調査
2．EPPS*** すなわちエドワーズ性格検査による調査
3．女子短大生用興味検査による調査

調査対象の入学年度・学年次，人数，実施年・月および実施テストは次のとおりである。

昭和48年度生2年次，n＝132，1974・10，EPPS.
昭和49年度生1年次，n＝147，1974・11，SIV および EPPS.
昭和51年度生1年次，n＝172，1976・11，SIV.
昭和52年度生1年次，n＝162，1977・7，SIV および興味検査。（興味検査のうち55名は

---

* A study on teacher of child nursing — Feature of students of child nursing course by persorality test and interest test. —

** Kikuchi-Gordon Survey of Interpersonal Values.

*** Edwards Personal Preference Schedule.

1977・12実施）

次に，調査に使用した検査の概要について簡単に紹介しておく。

1．KG－SIV について

Gordon（1960）が構成した対人関係価値尺度の日本版（菊池，1963）である。因子分析の結果から設定された6つの価値を，それぞれの領域に含まれる90項目のステートメントに表現し，それらの重要さを相対的に強制選択させる方法をとることによって，個人における対人関係場面での行動判断の枠組を明らかにしようとするものである。

6つの対人関係価値は次のようになっている。

① 支持（S：Support）他の人々から理解をもって扱われ，勇気づけられる。親切や思いやりをもって扱われる。

② 同調（C：Conformity）きちんと規則に従い，社会的に当を得た行動をする。他の人々から受け入れられる妥当な行動をする。

③ 承認（R：Recognition）他の人々から尊敬され，賞賛され，重要な存在として考えられる。他の人々の好ましい注意をひき，承認をうける。

④ 独立（I：Independence）自分の思うように行動する権利をもつ。自分自身の決定を自由にする。自分独自のやり方で行動できる。

⑤ 博愛（B：Benevolence）他の人々のためになることをする。共に分けあい不幸な人々に助力の手をさしのべ，寛大である。

⑥ 指導（L：Leadership）他の人々の行動に責任をもつ。他の人々の上に立つ。リーダーとしての位置につく。

2．EPPS について

Murray の欲求表を参考にして，Edwards（1959）が作成した性格検査の日本版（肥田野ら，1970）を使用した。

社会的望ましさの程度がほぼ等しくなるように工夫した1組（2つ）の陳述のうち，一方を強制選択させる方法をとり，225項目に反応した結果は，15の性格特性における相対的強さとして示される。

15の性格特性とその陳述の一例は次のとおりである。

① 達成（Achievement）何でも手がけたことには最善をつくす。なにか非常に有意義なことをなしとげる。

② 追従（Deference）計画をたてるとき立派な意見をもっている人の指示を受ける。自分が敬服する人を称賛する。

③ 秩序（Order）正確でよく整った文章を書く。机の上や仕事場は，いつも整とんしておく。

④ 顕示（Exhibition）「気がきいて，頭がよい」と思われるようなことを言う。人前で自分の容姿について注目されたり話題にされるようにする。

⑤ 自律（Autonomy）自分の思いどおりに行動できる。他の人が「型やぶりだ」と思うようなことをする。

⑥ 親和（Affiliation）友だちには誠実である。新しい友だちを作る。

⑦ 他者認知（Intraception）自分の感情や動機を分析してみる。何か事があった場合，人はそれをどう感じているか知る。

⑧ 求護（Succorance）困っているときは，友だちに助けてもらう。友だちから，あたたかい気持で接してもらう。

⑨ 支配（Dominance）自分の意見が反対されたら，自分の立場を弁護する。グループ活動の決定は自分がやる。

⑩ 内罰（Abasement）悪いとわかっていることを行なったときは，いつでも良心がとがめる。もし自分が悪いことをしたら，その罰を受けるのは当然だと思う。

⑪ 養護（Nurturance）友だちが困っているときには助けてあげる。自分の気にさわることを言う友だちでも許してあげる。

⑫ 変化（Change）新しいことや，ちがったことをやってみる。あちこち，いろいろなところに住んでみる。

⑬ 持久（Endurance）しなければならない仕事は，終りまでやりとげる。長い間気をちらさず，仕事に熱中する。

⑭ 異性愛（Heterosexuality）すてきな異性といっしょに歩く。性（セックス）の話には好んで加わる。

⑮ 攻撃（Aggression）自分と反対の意見の人を攻撃する。人からばかにされたら仕返しをする。

3．興味テストについて

SVIB（Strong Vocational Interest Blank）の方式にもとづき，椋野ら（1976）が女子短期大学生用として新たに作製した興味測定のためのテストを使用した。

興味目録としては，第1部職業関係，第2部勉強，第3部趣味および娯楽，第4部諸方面の活動，第5部人々の特性，第6部活動の選択，第7部二項目の比較，第8部あなたの能力と特性，にわたって，400の項目がある。一部に反応のしかたにちがうところもあるが，おおむね「好き」「無関心」「きらい」のうちどれかに印をつける方法で調査する。

短期大学の専攻学科によって異なった興味パターンがみられるところから，各専攻ごとの基準尺度が構成されている。

結　　果

1．ＳＩＶにみられる特質

過去数年間の資料にもとづいて，対人関係価値にあらわれる保育料学生の特質を検討してみた。

比較は，菊池（1964）による基準集団のうち，女子大学生（n＝599）と行なった。（表1）

基準集団を女子学生一般とみなすなら，保育学生はそれらよりも，S（支持），R（承認），B（博愛）において高く，C（同調）とI（独立）において低いことがわかる。ただし，49年度生だけはC（同調）のかわりにL（指導）が低い。

このことはすなわち，保育学生は一般女子学生よりも，他の人々から理解をもって扱われ，親切や思いやりをもって扱われる（支持）こと，他の人々の好ましい注意をひき，認められる（承認）こと，および他の人々のためになることをし，みんなに心から親切にしてあげる（博愛）ことなどを対人関係において重視しているが，他の人々から受け入れられる妥当な行動をする（同調）ことと自分独自のやり方で行動できる（独立）ことはあまり重要視しないという傾向があらわれている。ただ，49年度生は「同調」に有意差がみられなくて，他の人々の

表 1. 保育科学生のＳＩＶ得点平均と標準偏差および基準集団（女子大学生）との差の検定

	S	C	R	I	B	L
A．昭和49年度生１年次	16.65	17.73	9.31	16.68	19.73	9.90
(1974)　n=147	(4.42)	(4.70)	(3.68)	(5.48)	(5.55)	(3.69)
基準集団との差（A−D）	.85	−.77	1.21	−2.02	2.03	−1.30
t（df=744）	2.1330*	1.8730	3.5527***	4.2988***	4.3750***	3.5069***
B．昭和51年度生１年次	17.33	17.49	9.27	15.33	19.88	10.69
(1976)　n=172	(3.85)	(3.87)	(3.38)	(5.06)	(5.09)	(3.73)
基準集団との差（B−D）	1.53	−1.01	1.17	−3.37	2.18	−.51
t（df=779）	4.2016***	2.7198**	3.7204***	7.7600***	5.0919***	1.4643
C．昭和52年度生１年次	17.78	17.50	9.74	14.67	19.12	11.25
(1977)　n=162	(4.28)	(3.83)	(3.44)	(5.24)	(5.26)	(3.84)
基準集団との差（C−D）	1.98	−1.00	1.64	−4.03	1.42	.05
t（df=769）	5.1979***	2.6316**	5.0732***	8.9956***	3.2165**	.1394
D．基準集団（女子大学生）n=599	15.8	18.5	8.1	18.7	17.7	11.2
	(4.3)	(4.4)	(3.7)	(5.0)	(4.9)	(4.1)

* P<.05　　** P<.01　　*** P<.001

表 2. 保育科学生のＳＩＶ得点平均と標準偏差および基準集団（短大生）との差の検定

	S	C	R	I	B	L
A．昭和49年度生(1974)	16.65	17.73	9.31	16.68	19.73	9.90
n=147	(4.42)	(4.70)	(3.68)	(5.48)	(5.55)	(3.69)
差（A−D）	.37	−.56	.25	−.31	1.72	−1.41
t（df=472）	.8765	1.2672	.7187	.5899	3.4001***	3.0879**
B．昭和51年度生(1976)	17.33	17.49	9.27	15.33	19.88	10.69
n=172	(3.85)	(3.87)	(3.38)	(5.06)	(5.09)	(3.73)
差（B−D）	1.05	−.80	.21	−1.66	1.87	−.62
t（df=497）	2.7433**	2.0327*	.6546	3.4186***	4.0110***	1.4410
C．昭和52年度生(1977)	17.78	17.50	9.74	14.67	19.12	11.25
n=162	(4.28)	(3.83)	(3.44)	(5.24)	(5.26)	(3.84)
差（C−D）	1.50	−.79	.68	−2.32	1.11	−.06
t（df=487）	3.7097***	1.9707*	2.0654*	4.6286***	2.3079*	.1354
D．基準集団（短大生）	16.28	18.29	9.06	16.99	18.01	11.31
n=327	(4.16)	(4.32)	(3.41)	(5.19)	(4.86)	(4.94)

* P<.05　　** P<.01　　*** P<.001

上に立つ，リーダーとしての位置につく（指導）ことを重視しない傾向があることがわかる。

また，筆者が以前に中国短大の各科学生について調査した時の資料（1972）が，短期大学生一般をあらわす基準集団とするならば，表２のような比較ができよう。この基準集団は，家政，食物栄養，保育，英文，音楽の各科にわたる327名からなっている。

短大生一般との比較では，49年度生を除いて表１の場合とほぼ同じ傾向がみられる。

49年度生で有意差のみられるのはＢとＬだけである。Ｂ（博愛）において高く，Ｌ（指導）において低い。

51年度生は，表1ではみられたR（承認）の有意差がみられなくなった。S（支持）とB（博愛）において高く，C（同調）とI（独立）において低い傾向は同じである。

52年度生は，表1の場合と全く同じ傾向であって，S（支持），R（承認），B（博愛）で高く，C（同調），I（独立）で低い。

これらは入学年度による集団の質的変化としてもとらえることができそうである。

2．EPPS みられる特質

表3に示すように，49年度生1年次と，48年度生2年次の計279名分の資料について検討した。調査はいずれも1974年の秋に実施した。

1年と2年との間には親和の特性を除いて有意差がみられなかったので，1・2年を合計して基準集団と比較した。基準集団は，肥田野ら（1970）による日本版の女子大学生934名である。

表 3. 保育科学生のEPPS得点平均と標準偏差および基準集団との差の検定

	達成	追従	秩序	顕示	自律	親和
昭和49年度生1年次 (1974) n=147	11.19 (3.58)	10.86 (3.62)	11.46 (4.43)	12.05 (4.24)	13.20 (4.05)	16.27 (3.86)
昭和48年度生2年次 (1974) n=132	11.08 (3.70)	11.20 (3.53)	11.55 (4.42)	12.42 (3.62)	13.83 (4.10)	15.31 (3.92)
1年次＋2年次 n=279	11.14 (3.65)	11.02 (3.59)	11.50 (4.44)	12.23 (3.97)	13.49 (4.09)	15.82 (3.91)
基準集団(女子大学生) n=934	12.67 (3.93)	10.99 (3.85)	10.60 (4.62)	12.67 (4.12)	16.02 (4.49)	14.65 (4.35)
差 t (df=1211)	−1.53 5.7937***	.03 .1159	.90 2.8783**	−.44 1.5771	−2.53 8.4185***	1.17 4.0291***

他者認知	求護	支配	内罰	養護	変化	持久	異性愛	攻撃
16.68 (3.85)	18.05 (5.51)	9.39 (4.53)	17.84 (4.27)	16.67 (4.21)	15.45 (5.04)	15.80 (4.75)	13.76 (6.77)	11.33 (4.43)
17.39 (4.67)	17.33 (5.37)	9.20 (4.01)	17.69 (4.23)	17.55 (4.17)	15.67 (4.30)	16.31 (4.94)	12.83 (7.24)	10.64 (4.32)
17.02 (4.27)	17.71 (5.46)	9.30 (4.29)	17.77 (4.27)	17.09 (4.20)	15.55 (4.72)	16.04 (4.85)	13.32 (7.02)	11.01 (4.38)
16.86 (4.46)	16.90 (5.55)	11.05 (4.60)	16.28 (4 57)	16.06 (4.39)	15.22 (4.80)	16.50 (5.12)	12.08 (6.24)	10.94 (5.03)
.16 .5305	.81 2.1453*	−1.75 5.6567***	1.49 4.8460***	1.03 3.4700***	.33 1.0107	.46 1.3316	1.24 2.8252**	.07 .2097

* P<.05　　** P<.01　　*** P<.001

EPPS で測定される15の特性のうち，9特性に有意差がみられた。

保育科学生が高い関心を示すのは，秩序，親和，求護，内罰，養護，異性愛の6つの特性であり，低い平均得点であったのは，達成，自律，支配の3特性であった。

すなわち一般女子学生よりも保育学生は，身のまわりを整とんし，生活をきちんとし（秩序），たがいに親切で仲のよいグループに加わり（親和），困っているときは友だちに助けてもらうが（求護），友だちが困っているときにも助けてあげ（養護），自分の考えを押し通して争

うよりは，相手にゆずった方がよいと思い（内罰），異性と恋をしてみる（異性愛）ことなどに関心をもち，次のことにはあまり関心を示さない。それは，将来，職業または専門の分野で第一人者になる（達成）ことや，他人の考えにこだわらず，自分の考えどおりにしたり（自律），人を説得して自分がやりたいと思っていることをやらせる（支配）などの特性で低いといえる。

3．興味テストにみられる特質

先に椋野らとの共同研究（1975，1976）で明らかにしたところでは短大の保育科はじめ文学科，看護科，家政科（被服），食物科，音楽科のそれぞれの学生集団に特有の興味パターンがあることがわかった。

短大生一般（n＝1129）と保育科学生（n＝266）との間の反応%の差の大きいものを列挙して，保育科学生の特質と考えられるものを以下に示す。

① 職業関係では，保母・幼稚園教諭など専門関係はもちろん好きであるが，芸術，スポーツ，福祉など技能的職業や奉仕的職業を好み，文科系および理科系職業も好きでない。

② 勉強では，保育・教育や芸能関係が好きであり，自然科学系や英語などを含む文科系学科がきらいである。

③ 趣味および娯楽でもやはり音楽，芸能面のものが好きであり，クラフト，レース編のような静的なものより，ダンス，人形劇のような動的なものの方を好む。

④ 諸方面の活動では，スケッチや図案などは好きであり，幼児のしつけを研究したり，社会的活動は好きであるが，家政的な活動はあまり好きでない。

表 4. 保育科（幼児教育学科）採点表（35項目）　　（椋野ら，1976より）

番号	項　目	好き	無関心	きらい	番号	項　目	好き	無関心	きらい
37	手芸の先生	＋1		－1	264	協調的な人	＋1	－1	
84	保育園保母	＋1	－1	－1	270	自信のある人	＋1		
92	幼稚園教諭	＋1	－1	－1	297	人形劇の巡回公演をする	＋1		
93	幼児番組タレント	＋1	－1	－1	306	各国の社会福祉施設を見る	＋1		－1
94	遊びの指導法	＋1	－1	－1					
96	育児学	＋1	－1	－1	311	孤児援助の演奏をきく	＋1		
106	音楽リズム	＋1	－1	－1	326	フレーベル幼稚園のあったブランケンブルグに行く	＋1	－1	
117	教育原理	＋1							
118	教育心理学	－1							
121	工作	＋1	－1	－1	342	喫茶店より玩具店			－1
130	児童福祉法	＋1	－1	－1	352	病人の看護より施設の子供の世話	＋1	－1	－1
131	小児体育	＋1	－1	－1					
159	幼児教育学	＋1	－1	－1	355	女流作家より女流登山家			－1
175	クラフト	－1			361	雑誌記者より体育指導者	＋1		－1
185	図案	＋1	－1		362	血液検査より体育測定	＋1		－1
186	図画工作	＋1			366	音楽会で自作の歌を歌うより人形劇のせりふをおぼえる	＋1		
221	劇のため人形を作る	＋1							
226	子供に教える	＋1							
229	慈善のため募金する	＋1	－1	－1	370	看護実習より保育実習	＋1	－1	－1
256	リズム運動を指導する	＋1	－1		388	他人が認めない小さなことを怠らずやる	＋1	－1	
257	幼児のしつけ法を研究する	＋1	－1	－1					

⑤　人々の特性では，自信ある人，真理を探究する人，夢を持ちつづける人，判断にたけた人が好きである。

⑥　活動の選択では，幼児教育関係が好きであるし，ボランティアなど社会的活動も好きである。

⑦　その他，病人の看護より施設の子どもの世話が好きであり，雑誌記者より体育指導者が好きなどが目立つ。

表４は保育学生の興味を測定する採点表であるが，上述の傾向を一覧しているといえる。これは，興味目録400項目のうちから，D. Campbell（1971）の基準にしたがって，保育科の興味を抽出したものであり，これを用いて尺度化の可能性が確かめられている。

そこで，昭和52年度１年次学生（n＝162）に実施した興味テストをこの採点票により採点したのであるが，その結果は，素点では＋25～－17の範囲に分布し，平均値7.11，標準偏差8.23であった。

これを標準得点に換算して示したものが図１である。

なお，正規化の手続で標準集団となったのは，専門性の高まったと考えられる２年次後期の学生であり，その平均値は8.73（SD＝8.83，n＝266）であった。今回の１年次学生の平均値の方が少し低い傾向はあるが，有意差はみられなかった。（t＝1.8840）

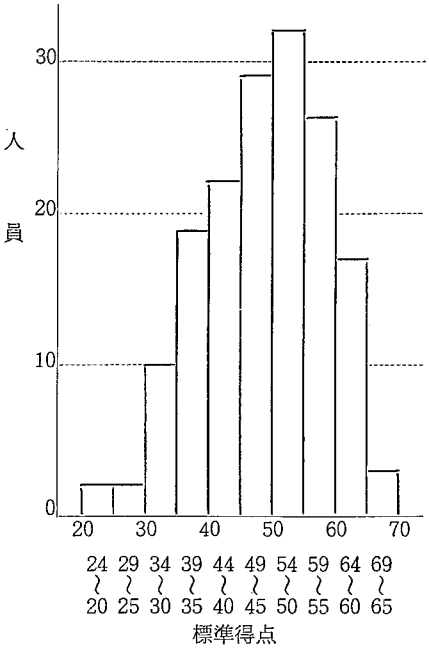

図 1，保育科学生の興味得点の分布

4．ＳＩＶとＥＰＰＳの関連について

この二つのパーソナリティテストにはかなりの類似性がみられることに気づくが，両テストを共通して実施した昭和49年度生（n＝147）について，それぞれ有意差の認められた特性において関連のありそうな組合せを選んで検討した。

結果は表５のとおりであるが，いずれも0.1%レベルで有意な相関が認められる。

表 5．昭和49年度生におけるＳＩＶとＥＰＰＳの相関

ＳＩＶ		支持（S）	独立（I）	博愛（B）	指導（L）
	M	16.65	16.68	19.73	9.90
	SD	(4.42)	(5.48)	(5.55)	(3.69)
ＥＰＰＳ		求護	自律	養護	支配
	M	18.05	13.20	16.67	9.39
	SD	(5.51)	(4.05)	(4.21)	(4.53)
r		.3809	.4721	.4339	.3625
t		4.9606*	6.4488*	5.7992*	4.6837*

＊ P＜.001

5．ＳＩＶ と興味テストの関連について

昭和52年度１年次生（n＝162）において，SIV と興味テストが共通して実施されているので，この資料により両テストの関連を検討した。（テスト実施時期はほぼ同時であるが，興味テストの55名分のみ都合で５カ月遅れた。しかし平均値において0.08の差しか認められず，分布も相似であるので追加した。）

表 6. 昭和52年度生における ＳＩＶ と興味テストの相関

興味テスト	S I V					
	S	C	R	I	B	L
M 7.11 SD (8.23)	17.78 (4.28)	17.50 (3.83)	9.74 (3.44)	14.67 (5.24)	19.12 (5.26)	11.25 (3.84)
r	−.1567	.0725	−.0674	−.2117	.2701	.0991
t	2.0321*	.9220	.8564	2.8034**	3.6855**	1.2659

* P<.05　　** P<.01

表６にみるとおり，Ｂ（博愛）と正相関があり，Ｓ（支持）とＩ（独立）で逆相関がみられる。

博愛と正相関があるということは，保育の興味得点が高い程，対人関係において博愛的価値を重視する度合が高い。すなわち，保育科に特徴的な興味をより強く示す者ほど，対人関係で人々のためになることをするというような博愛的な傾向があるといえる。

支持と独立とで逆相関とは，保育の興味が強ければ強いほど対人関係場面での支持的価値と独立的価値を重視する度合が低い，すなわち，他の人々から理解をもって扱われ，勇気づけられることは重くみないし，自分の思うように行動し，自分自身の決定を自由にすることもそれほど重要だとは思わない傾向があるといえる。

考　　察

二つのパーソナリティテストと興味テストをとおして，保育学生の特質といえるものを検討したのであるが，それぞれのテストから得られた結果は，いずれも日々保育学生と接している筆者らの感じているところとよく一致しているといえる。

SIV と EPPS とは，個人の特性について一方では価値的側面を，他方は欲求的側面を測定するという試みであるが，いずれも個人の抱いている基本的な動機について取扱うところでは，かなり類似した尺度であると考えられる。方法的にも，社会的望ましさ（social desirability）を検討したうえで強制選択法をとっていることなど共通点が多くみられる。結果の４でみられたとおり，二つのテストで測定される特性間にかなり相関があることも類似性を裏づけるものであろう。しかしながらいずれも保育学生の理解に有用な資料を提供してくれるものであると同時に，広くパーソナリティの理解に有効な尺度であることが再認されるところである。

SIV にみられる性差について Gordon（1960）は，男性はＩ（独立）とＬ（指導）で高く，女性はＳ（支持），Ｃ（同調），Ｂ（博愛）で高いことを見出している。また，EPPS については肥田野ら（1970）の日本の標準化集団において，男女の有意差の認められる特性は多く，男性が高いのは達成・顕示・自律・支配・異性愛・攻撃の各特性であり，女性の方が高いのが，

追従・秩序・親和・他者認知・求護・内罰・養護・持久の各特性であるとされている。今回の調査の結果からは，女性の標準集団との比較ではあるが，男性で高いとされる特性ではより低く，女性の高い特性にはより高いものが多く目についた。このことから，保育学生は一般女子学生よりもさらに女性的な傾向が顕著にみられるといえるようである。

興味テストにみられた傾向では，職業・勉強・趣味娯楽・諸活動その他にわたって，保育の専門間係のことがとにかく好きであり，音楽・芸能的なものと運動的なものが好きであるといえよう。これらから一口にいえば，奉仕的で世話好き，活動的で明るいという印象を受けるものである。

また，SIV と興味との相関から気づかれることは，保育の興味得点の高い者ほど博愛的価値を重要視し，支持的価値と独立的価値を重視しない傾向がみられたのであるが，博愛的価値との正相関および独立的価値との逆相関については結果１にみられた傾向とも一致することで十分うなずけるものである。しかし，支持的価値との逆相関については矛盾するとも考えられる。ただし，結果１の場合は女子大学生一般あるいは短大生一般との比較を問題にしたのであって，興味テストとの相関では保育学生集団内のことが検討されているのである。このことを念頭に置いてさらに考察すれば，保育の興味が高いほど支持されることに重きを置かない，逆にいえば保育の興味の低いほど支持されることを求めるようであるともいえよう。支持的価値を重視しないということは，他の人々から勇気づけられるとか親切や思いやりをもって扱われることにあまり重きを置かないということである。したがって，博愛は重視するのであるから，他人には親切にしてあげ助力をおしまないが，他人からはそうしたことを求めない。支持されることを一面では望むだろうが，それをあえては求めない傾向と考えてよいのではなかろうか。

ところで，今まで検討してきたことは集団的な特質の面が中心であったのであるが，個人得点に着目すれば，学生個人の理解に有効な資料となることはもちろんである。SIV，EPPS，興味テストのいずれも作成者の意図にはカウンセリング，進路指導，職業指導，適応関係の調査研究などに用いられることが含まれているのであって，筆者も資料の整理をしながら個々のケースにあたって納得したり気づいたりすることが多かった。

適応ないし適性の問題を考える上でも，これらのテストによる資料が有効に利用できると考えられる。すなわち，教育的観点からも教育ないし学習の効果は，要求（動機）と興味にもとづく時最大になるであろうし，学校における心理的安定も得られやすいと考えられる。また，将来その個人が価値を置き，興味にもとづく職業に就いた時，適性であろうと予想されるからである。

＜付記＞ SIV と EPPS については，岡山心理学会第24回大会（1976. 12）で，SIV と興味テストついては，岡山心理学会第25回大会（1977. 12）でそれぞれ口頭発表し，また興味テストに関しては共同研究として，日本心理学会第39回大会（1975. 9）に発表した内容を一部加筆修正して収録しました。共同研究者の今治明徳短大椋野要先生，岡山就実短大笹野完二先生，岡山県立短大松田淳之助先生に感謝申し上げます。特に椋野先生には色々と御指導御助言をいただきましたことのお礼を申し上げます。

文　　献

Campbell, D. P. Handbook for the Strong Vocational Interest Blank, Stanford University Press, 1971.

Edwards, A. L. Manual : Edwards Personal Preference Schedule. New York : The Psychological Corporation, 1959.

Gordon, L. V. Manual for Survey of Interpersonal Values. Science Research Associates, 1960.

Super, D. E., Crites, J. O. Appraising Vocational Fitness, Harper & Brothers, 1962.

菊池　章夫　　対人関係価値の測定（1）. 福島大学学芸学部論集, 1963, 8—14.

菊池　章夫　　日本人の対人関係観 —L. V. Gordon の SIV 資料を中心にして—, 年報社会心理学5, 1964, 161—177.

肥田野　直ほか訳編　EPPS 性格検査手引, 日本文化科学社, 1970.

平松　芳樹　　志望専攻別対人関係価値の比較研究—短大生の場合—, 中国短期大学紀要第3号, 1972, 33—40.

平松　芳樹　　保育科学生における対人関係価値の発達的特質, 中国短期大学紀要第4号, 1973, 29—32.

平松　芳樹　　望ましい保育者像の研究— SIV による検討—, 中国短期大学紀要第6号, 1975, 9—16.

椋野　　要, 笹野　完二, 松田淳之助, 平松　芳樹　　短大生の興味の研究, 日本心理学会第39回大会発表論文集, 1975, 511—513.

椋野　　要, 笹野　完二, 松田淳之助, 平松　芳樹　　女子短期大学生の興味測定尺度構成, 今治明徳短期大学研究紀要第9集, 1976, 15—42.